

機関番号：22101

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530599

研究課題名 (和文) 青年期の次世代育成力を育てる支援方略の開発と検討

研究課題名 (英文) Development and Evaluation of a Supportive Strategy for Cultivating the Capability to Nurture the Next Generation among Adolescents

研究代表者

落合 幸子 (OCHIAI YUKIKO)

茨城県立医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：80015916

研究成果の概要 (和文)：本研究では、青年期の「次世代育成力」(capability to nurture the next generation)を「次世代の子どもたちを育てることへの自信」ととらえ、次世代育成力を育てるための有効な教育的支援方略を開発することを目指した。青年期の次世代育成力の関連要因を検討した結果に基づき、次世代育成力を育てる支援方略を開発した。そして、次世代育成力を育てる支援方略を実践し、支援方略を受けた青年の「次世代育成力尺度」による得点変化と感想を分析してその効果を検討すると共に、より効果的な支援方略を再検討した。

研究成果の概要 (英文)：The aim of this study was to develop an effective supportive strategy for cultivating adolescents' capability to nurture the next generation, that is, instilling in them confidence to raise the next generation of children. Based on an examination of factors associated with adolescents' capability for such nurturing, we developed a supportive strategy for cultivating their capability. We then implemented the supportive strategy and evaluated its effects by determining changes in the adolescents' scores on the scale measuring such capability and their impressions. The results of an analysis suggested a more effective supportive strategy can be implemented.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
20年度	1,200,000	360,000	1,560,000
21年度	800,000	240,000	1,040,000
22年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：次世代育成力、カリキュラム、メッセージ、親に対する感謝、子育て観、命の意味づけ、世代間伝達、青年期

1. 研究開始当初の背景

性別にとらわれず、種としてのヒトが各社会単位ないしは、種全体として次世代を育てていく能力は「次世代育成力」と呼ばれ、その重要性が指摘されてきた。また、現在の少子化現象の背景には、「次世代を生み育てる

心(generativity)の危機」があるという。「次世代育成力」と「次世代を生み育てる心(generativity)」とは、必ずしも同一の概念ではない。しかし、性別にとらわれず、人が人を育てることを問題としているという共通点が指摘できる。

次世代育成力あるいは generativity については、主に成人期以降の既に次世代を育成している者を対象として研究が進められてきた。しかし、「次世代を生み育てる心 (generativity) の危機」にある現代においては、成人期以前の青年期に着目して、青年にとって未来の出来事である次世代育成に対する自信を育てることは有意義であると考えられた。

そのような中、青年期の次世代育成力を「青年期の者が持つ次世代の子どもたちを育成することへの自信」と定義して、「誕生を肯定できるという自信」、「自己成長できるという自信」、「伝えるものを持っているという自信」、「自己成長できる自信」という4下位尺度からなる測定尺度を、研究分担者の菱谷純子を中心に開発した。そして、Erikson, E.H.による漸成発達論を参考に、青年期の次世代育成力と親からの存在肯定メッセージとの関連を検討した。本研究では、この「次世代育成力尺度」を用いることで、次世代育成力の関連要因を検討し、次世代育成力のための教育的支援方略の効果を検討していくことにした。

2. 研究の目的

本研究では、性別にとらわれず、次世代を育てる能力が重要であるという立場から、青年の次世代育成力に関連する要因を明らかにし、次世代育成力を育てるために有効な教育的支援方略を開発することを目指した。具体的には、次の3つの目的に沿って研究を進めた。

- (1) 青年期における次世代育成力に関連する要因を解明する。
- (2) 次世代育成力に関連する要因の検討結果に基づき、次世代育成力を育てる支援方略を開発する。
- (3) 開発した次世代育成力を育てる支援方略を実践して、その効果を検討し、より効果的な支援方略を再検討する。

3. 研究の方法

(1) 青年期における次世代育成力の関連要因の解明

次世代育成力に関わる先行研究を整理し、「親に対する感謝」と「命の意味づけ」に着目して検討した。前者の「親に対する感謝」は前世代から育てられてきた存在としての青年、後者の「命の意味づけ」は、命を受け継ぎ伝える存在としての青年にそれぞれ焦点を当てたものといえる。方法の詳細は、以下の通りである。

①次世代育成力に関わる先行研究の整理

次世代育成力に関わる先行研究を収集し、分類、整理した。あわせて、「次世代育成力尺度」の下位尺度項目を精選し、青年期の次

世代育成力と親からの存在肯定メッセージとの関連についてまとめた。

②次世代育成力と母親に対する感謝との関係

次世代育成力尺度と、研究分担者である池田幸恭が作成した母親に対する感謝を尋ねる20項目で構成された質問紙調査を実施し、大学生223名の回答を分析した。

②命の意味づけ尺度の開発

命および命に関連する先行研究、医療系大学生による自由記述、先天性心疾患の患者の面接結果から、命の意味づけに関する記述を収集し、項目を作成した。作成した命の意味づけ尺度68項目について質問紙調査を実施し、大学生434名の回答を分析した。

(2) 青年期における次世代育成力を育てる教育的支援方略の開発

青年期における次世代育成力の関連要因の検討結果に基づき、4回の授業で構成されたカリキュラムを開発した(表1)。カリキュラム開発において留意した点は、大きくは次の3点にまとめられる。

①世代間伝達の重視

青年とは、前世代から育てられてきたと同時に、次世代を育てていくことになる存在である。このような世代間伝達を重視し、次世代育成力の関連要因の中でも特に「存在肯定メッセージ」と「親に対する感謝」に着目し

表1 青年期の次世代育成力を育てる教育的支援方略として開発したカリキュラム

1回目	青年期の次世代育成力
テーマとねらい	次世代育成力の概念とその育成の意義について理解を深め、自らの生育環境をふり返ることで次世代の育成への関心を高める。
主な授業内容	・次世代育成力が注目される社会背景 ・次世代育成力の4側面の説明 ・次世代育成力の関連要因の紹介
主な討論課題	・子育てに対する意識 ・次世代育成力の4側面のふり返り ・次世代育成力とこれまでの生育環境との関係
2回目	次世代育成力と重要な他者からのメッセージ
テーマとねらい	それまで受講生が受け取ってきた親や教師など重要な他者からのメッセージを再認識しその影響をふり返る。さらに、自分が次世代の子どもたちに何を伝えていきたいかを自覚する。
主な授業内容	・次世代育成力と親からの存在肯定メッセージとの関連の研究結果 ・親からの存在肯定メッセージの説明 ・重要な他者から受け取るメッセージの重要性の確認
主な討論課題	・親からの存在肯定メッセージが与えた影響 ・自分の生き方に影響を与えた親や教師など重要な他者からのメッセージ ・次世代の子どもたちに送りたいメッセージ
3回目	次世代育成力と親に対する感謝
テーマとねらい	親に対する感謝について理解を深めふり返ることで、次世代育成への意識を高める。
主な授業内容	・青年期の親に対する感謝の説明 ・次世代育成力と親に対する感謝との関係に関する研究成果 ・いのちの循環という視点の説明
主な討論課題	・親に対する感謝を感じた体験 ・親に対する感謝の表明 ・親に対する感謝と次世代の子どもたちを育てようという意識とのつながり
4回目	次世代育成力と子育て観
テーマとねらい	時代による子育て観の変遷を知り、自分が望む子育てのイメージを育む。また子育てにおいて共同体の力を借りることができることを知る。
主な授業内容	・江戸時代から平成時代までの子育て観の時代による変遷 ・子育てに関する最近の話題
主な討論課題	・子育て観の時代による変遷に関する意見 ・平成時代に生まれ育った自分たちが受けてきた子育て ・子育ての展望と人生設計

た。さらに、世代間伝達のより広範囲な場としての「生育環境」と、より長期的展望である「時代による子育て観の変遷」をカリキュラムに取り入れた。

② 共同体による次世代育成の着目

次世代育成を、個人や家庭のみだけでなく、共同体の中で行うことの意義を各授業内で伝えた。

③ 青年間の討論の導入

同じ青年期にある者同士の育て合いを促すため、すべての授業で個別作業に加えて、小グループ討論を導入した。

(3) 次世代育成力を育てる教育的支援方略の実践とその有効性の検討

2010年6月から7月に、医療系大学の4回の授業において、開発した次世代育成力を育てる教育的支援方略を実践した。当該授業の受講者は、141名であった。

次世代育成力を育てる教育的支援方略の有効性については、次の3つの観点から検討した。

① 次世代育成力尺度得点の変化

第1回目の授業開始時と、最終回の授業最後に、次世代育成力尺度16項目への回答を求め、支援方略の実践前後の次世代育成力尺度の得点を比較した。なお、第1回目の授業より1ヵ月ほど前にも、次世代育成力尺度への回答を求め、次世代育成力の個人差を調整するために活用した。

② 支援方略を受けた感想の分析

最終回の授業最後に、次世代育成力を育てるための4回の授業を受けた全体的な感想を求めた。

③ 各授業の効果の分析

各授業の最後に、授業効果を尋ねる10項目と、その回の感想を求めた。
なお、支援方略の実践にあたっては、研究への協力は任意であり、協力しないことで不利益を被ることはないことや授業成績には関係しないことを説明し、研究協力者からの同意を得た。

4. 研究成果

(1) 青年期における次世代育成力の関連要因

青年期における次世代育成力の関連要因を検討した結果、主に次の3つの成果が得られた。

① 次世代育成力尺度の下位尺度項目の選定と親からの存在肯定メッセージとの関連

次世代育成力尺度を用いる上で、回答者の負担を軽減するため、下位尺度ごとに4項目の計16項目を選定した(表2)。さらに、親からの存在肯定メッセージが次世代育成力に直接関連すること、さらに対人的信頼感を介して次世代育成力に関連することを確認した。

表2 青年期における次世代育成力尺度

1-誕生を肯定することができるという自信 ・私は、子どもの誕生を考えただけで、幸せな気分になる ・私は、子どもの誕生を幸せだと感じる ・私は、子どもの誕生についての話を、幸せな気持ちで聞くことができる ・私は、子どもを世話することに、幸せを感じるだろう
2-自己成長できるという自信 ・私は、子どもとの関係を作ることを通じて、人間的に成長するだろう ・私は、子どもに愛情を伝える方法を、上の世代から教わった ・私は、子どもを育てることから、得るものはあまりないと思う ・私は、子どもを通じて、新しい世界が広がると思う
3-伝えるものを持っているという自信 ・私は、時代を超えて伝わる大切なものを上の世代から受け継いでいる ・私は、子どもとの関係を作ることを通じて、自分の視野が広がると思う ・私は、子どもに伝える「生活の知恵」を上の世代から教わっている ・私は、上の世代から、子どもを育てる方法を教わった
4-地域社会の力を借りることができるという自信 ・私は、子どもが病気になったときに、近所の人に助けを求めるだろう ・私は、子どもにとってよい環境を作るために地域活動を頑張るだろう ・私は、子どもを育てるとき、近所の人に助けてもらおうだろう ・私は、子どもを犯罪から守るために、地域の人と協力するつもりだ

② 次世代育成力と親に対する感謝との関係

大学生における次世代育成力と母親に対する感謝との関連を検討した結果、男性では、次世代育成力4下位尺度すべてと「援助してくれることへのうれしさ」に正の関連が示された。女性では、次世代育成力4下位尺度すべてと「産み育ててくれたことへのありがたさ」に正の関連、さらに「伝えるものを持っているという自信」、「誕生を肯定することができるという自信」と「援助してくれることへのうれしさ」に正の関連が示された。

このことから、青年が母親に対する感謝を感じることは、母親との関係にとどまらず、次世代の子どもたちを育てる自信につながることを示唆された。

さらに、支援方略3回目「次世代育成力と親に対する感謝」の履修者による討論成果を分析した結果、親に対する感謝が青年期の次世代育成力を育てる上で、世代間伝達の好循環が生じていると考えられた。

② 命の意味づけ尺度の開発

大学生の回答を分析した結果、命の意味づけ尺度は、「命としてあることの実感」、「自分の命を人のために役立てたいという使命感」、「自他の命の証を遺したいという願い」、「世代を超えた命のつながり感」、「命の相互のつながり感」、「限りある命の実感」という6下位尺度から構成された。そして、命の意味づけ尺度について、内的整合性と安定性、死生観および生死に関する経験との関連から、ある程度の信頼性と妥当性が確かめられた。

(2) 次世代育成力を育てる教育的支援方略の有効性

支援方略前後での次世代育成力尺度の得点を比較した結果、下位尺度「伝えるものを持っているという自信」と「地域社会の力を借りることができるという自信」の得点が向上したことが示された。

また、支援方略を受けた全体的な感想や各授業の感想でも、次世代育成力の重要性に気がついたという記述や、次世代育成力が高まった実感があるという記述が得られた。特に、支援方略最終回「次世代育成力と子育て観」では、平成時代の子育てが有しているジレンマを解決する手立てとして、過去に行われていた地域の力や共同体を活用するような子育ての存在に青年が着目していた。

本研究では開発した次世代育成力を育てるための教育的支援カリキュラムの有効性が実証的に確認され、青年期の次世代育成力の育成に貢献した意義は大きい。

(3) 次世代育成力を育てる教育的支援方略の展望

次世代育成力を育てるより有効な教育的支援方略の展望を、次の3点にまとめる。

① 支援方略の内容の充実

本研究では、青年期の次世代育成力の育成にあたって世代間伝達を重視したことから、関連要因として見出した「命の意味づけ」を支援方略の内容には含めていなかった。命を受け継ぎ伝える存在としての青年に焦点を当てた、次世代育成力を育てる教育的支援方略の可能性が指摘できる。

また、今回の教育的支援方略では、次世代育成力尺度の下位尺度「誕生を肯定できるという自信」と「自己成長できる自信」の得点は変化しなかった。今後は、次世代育成力の各側面を育てることができるよう、支援方略の内容を充実させていくことが必要であるといえる。

② 世代間交流を通しての支援方略の開発

本研究から、次世代育成力の育成における「世代間伝達」という観点の重要性が指摘できる。したがって、世代別の次世代育成力の育成にとどまらず、たとえば青年と成人が異なる立場から同じ次世代育成について語り合うといった世代間交流を通して次世代育成力を育てる支援方略も有効であると考えられた。

③ ピアエデュケーションによる支援方略の開発

今回開発した次世代育成力を育てる支援方略は、開発者が構成したカリキュラムに沿った授業を展開する形式であり、学生の自由な討論に制約をかけている側面があることが指摘できる。将来の次世代育成の主体として、学生自らが授業内容を検討し、同世代の学生同士によるピアエデュケーションを促すという形式の教育的支援方略も有効であると考えられた。

次世代育成力を育てる教育的支援方略の開発とその有効性の検討、および命の意味づけ尺度の開発については、学術雑誌への投稿準備を現在進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 池田幸恭、菱谷純子、高木有子、梁明玉、落合幸子、親に対する感謝が青年期の次世代育成力を育てるという心理的機制的検討、茨城県立医療大学紀要、査読有、16巻、2011、43-52
- ② 高木有子、池田幸恭、菱谷純子、梁明玉、落合幸子、医療系大学生が捉える平成時代の子育て観と子ども観の探索的検討、茨城県立医療大学紀要、査読有、16巻、2011、75-84
- ③ 池田幸恭、菱谷純子、高木有子、梁明玉、落合幸子、大学生における次世代育成力と母親に対する感謝との関係、茨城県立医療大学紀要、査読有、15巻、2010、42-52
- ④ 菱谷純子、落合幸子、池田幸恭、高木有子、青年期の次世代育成力と親からの存在肯定メッセージとの関連、母性衛生、査読有、50、2010、552-559
- ⑤ 菱谷純子、落合幸子、池田幸恭、高木有子、青年期の次世代育成力尺度の開発とその検討、母性衛生、査読有、50、2009、132-140

6. 研究組織

(1) 研究代表者

落合 幸子 (OCHIAI YUKIKO)
茨城県立医療大学・保健医療学部・教授
研究者番号：80015916

(2) 研究分担者

池田 幸恭 (IKEDA YUKITAKA)
和洋女子大学・人間・社会学系・助教
研究者番号：70523041
菱谷 純子 (HISHIYA SUMIKO)
福島県立医科大学・看護学部・助教
研究者番号：20586458

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

高木 有子 (TAKAGI YUKO)
茨城県常総市教育委員会適応指導教室
梁 明玉 (YANG MYUNGOK)
茨城県立医療大学・保健医療学部・嘱託助手